
「ようこそ欧州麦酒カフェへ」

城戸高嶺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「ようこそ欧州麦酒カフェへ」

【Nコード】

N1706V

【作者名】

城戸高嶺

【あらすじ】

ドイツ、ベルギーなどヨーロッパ各国のビールを専門に扱うカフェバーに勤務する私。個性的なスタッフとグルメ、美酒、毎回登場する魅力的なゲストたちとのプチストーリーです。

グラス6 女優の涙

プロローグ

『ようこそ、当店はヨーロッパ各国のビールとおいしいお料理を堪能していただくカフェバーでございます』

そんなふれこみでオープンした欧州麦酒カフェ。

スタッフは女好きの安倍店長と、こだわりの矢嶋シェフ、そして平凡な私、城戸高嶺。個性的な二人のスタッフに囲まれた上、毎回登場するゲストにも振り回されて・・・

「ねえ城戸ちゃん、今入ってきた人さあ、如月^{きひる}みゆきだよねえ」

「ええ、間違いないと思います。予約の電話を頂いたときもきさなぎ様って名乗られていましたから。でもまさかあの大女優の如月みゆきだなんてびっくりしちゃいますよね」

「で、ドリンクは何を注文したの？」

「それがきいたことも無い名前の飲み物だったので・・・お客様によるとトマトジュースとビールを半々に割ったのだって言うんですけど」

「それって、レッドアイだろ」

「エーっ、やっぱそんな飲み物あったんですか？」

「何、レッドアイも知らないの？それでなんて答えたの？」

「とりあえずかしこまりましたって言いました。どちらも材料ありますから」

「ちょっとお、しっかりしてよね。飯にもうちはビール専門カフェなんだから、ビールベースのカクテルの名前くらい知っておいてよ」

「だってメニューにそんなカクテルなんか載って無かったじゃないですか？」

「まあ、そりあそうだけど・・・」

すると、いつの間に外出から帰って来たのか、店長阿倍が厨房にいた。

「確かに三十路みそじを過ぎた女がレッドアイも知らないとは情けないが、メニューに載ってなかったのも事実だ。あまり城戸ばかり責めるな、八嶋」

（みそじとレッドアイは関係ないでしょうが）

「まあ店長の気持ちもわかりますけど、とにかくネーミングは急いでくださいよ。今回はこの程度で済みましたけど、定番ドリンクがメニューに載ってないのはトラブルのもとです・・・ったくオリジナルならともかく、既存のしかも定番カクテルにいまさらなんでネーミングでこだわる必要があるのかなあ・・・」

ぶつぶついいながらシェフ八嶋は冷蔵庫からトマトジュース、レモンなどを取り出してきた。

店長阿倍は全く意に介さぬ様子で、専用の冷蔵庫からビールと冷えたピルスナーグラスを取り出した。

「城戸、今日は俺が作るからしっかり見て覚えろ。次回から注文が入ったらお前の仕事だぞ」

「は、はい」(えっそうなの?)

「まず、グラスはこの細長いやつを使う。もちろんグラスもよく冷やすことだ」

「はい」(なんか緊張する)

「そして始めにトマトジュースをグラスの半分まで注ぐ。順番を間違えるなよ」

「はい」

「そこにレモンの果汁を絞り入れる。そうつと、・・・こんな具合に。そして最後にビールを注ぐ。トマトジュースの上からでもちゃんと泡が立つよう高い位置からしっかり注げ。いいな」

「はい。」(思ったより簡単かも)

「お前、今思ったより簡単かもって思っただろう?」

「えっ? どうしてわかったんですか?」

「顔に書いてあるぞ。わかりやすいやつだ」

「そんな、ひどい・・・」

「いいか、簡単だと思ってなめてかかるんじゃないぞ。レッドアイは奥が深い。注ぐ順番や注ぎ方、ビールの種類で全く別の飲み物に変わるんだ」

「はい、わかりました」

「じゃあお客のところへ運んで来い」

「はい」

如月みゆきは、店の奥の席でマネージャーらしき男性とテーブルを囲んで座っていた。

なにやらひそひそとはなしていたが、私が近づくとぴたっと会話を止めた。

「お待たせしました。ご注文のお品です」

私はレッドアイとコーヒーをテーブルの上に置くと一礼して立ち去った。

「だから明日じゃ遅いのよ」

背後から押し殺したような怒気を含んだ女優の声。

「でも如月先生」

「あなた何年私のマネージャーをやっているの？記事は明日の朝に

は出るのよ」

「はい・・・」

「記者会見は何が何でも今日中に行います。とにかく早く会場をさがしてちょうだい、一流のホテルを押さえるのよ」

「わ、わかりました」

「すぐ行つて」

「はい」

マネージャーはコーヒーもそこそこに席を立ち、会計を済ますと急ぎ足で出て行った。

その後もしばらくの間如月みゆきはその席にたたずんでいた。

「ねえ、城戸ちゃん。あのマネージャーずいぶんとあわてて出て行ったけど、如月みゆきと何話してたの？」

シェフ八嶋、気になって仕方がないようだ。店長阿倍はレッドアイを作ったらまたどこかに出かけてしまった。

「さあ、よくわかりませんが、記者会見がどうのっていつてました」

「ふうん。やっぱり芸能人はちがうよな」

「でも本当にきれいな人ですね。テレビで見るよりずっと細いし」

「確かそろそろ60になるんだよねえ」

「とてもみえませんね」

「やっぱだんなが若いと違うのかな」

「如月みゆきのだんなさんて俳優の伊藤英二ですよ」

「そうそう、20も年下の色男」

「結婚報道された時はずいぶん話題になりましたよね」

「一流女優と駆け出しの無名俳優のカップル、目的は金か売名か、なんてね」

「当初は一年も持たないっていわれてましたけど」

「結婚してから15年くらいたつよね」

「意外でしたねえ。今じゃ彼のほうが売れてるみたいですし・・・それより八嶋さん、店長、レッドアイに何かこだわりがあるんですか？」

「そうなんだよ。城戸ちゃん、何でも昔付き合った女との思い出のカクテルらしいよ。僕も詳しいことはよく知らないけど。レッドアイって二日酔いの赤い目のことを意味するらしいんだけどね。ネーミングが気に入らないから他を考えろっていうんだ」

「名前が決まらないからメニューに載せられなかったんですね」

「そういうこと。だから城戸ちゃんもなんかいいのないか考えてみてよ」

「そんな急に言われてもちよっと思いうかばないですよ・・・あれ？」

「どうした？」

「如月みゆき、泣いているみたい」

「カクテルにタバスコ入れすぎたのかな？」

「そんな、子供じゃないんですから・・・」

「城戸ちゃんお水のおかわり持ってようすみてきたら？」

「だめですよ、そっとしておいてあげましょう」

確かに女優は肩を震わせ泣いていた。

しばらくすると彼女は私を呼びつけた。そして手にチップを握らせた。

「そんないけません」

「いいからとっておいて。ここのレッドアイ、今まで飲んだ中で一番美味しかったわ。どんなビールを使っているのかしら？」

「はい、ビットブルガーピルスでございます。ドイツの最高級ピル

スナーです」

「そう。・・・ここいいお店ね。今度は誰かを連れてゆっくりお食事をしに伺うわ」

そういつて彼女は店を出て行った。その表情ははさつきまで泣いていたとは思えない、すがすがしい笑顔だった。

閉店後。 11時30分。

店長阿倍、シェフ八嶋、私の3人はまだ店内にいた。

私は洗った食器類を片付け、シェフは明日のランチの下ごしらえをし、店長は2杯目のビール

を飲みながらテレビを見ていた。女性アナウンサーの声が聞こえる。

「それでは先ほど行われました、女優如月みゆきさんの離婚記者会見をもう一度ごらんいただきましょう」

私たちはみないっせいにテレビに注目した。

女優「えー、私如月みゆきは本日俳優伊藤英二と離婚いたしましたことをご報告いたします。」

いっせいにフラッシュがたかれた。如月みゆきは正面を見据えてまばたきひとつしない。

記者「やはり伊藤さんの女性関係が原因ですか？」

女優「15年前、私たちが結婚するにあたって、世間の誰もが好奇

の目で私たちを見、二人の仲はそれほど続かないだろうとささやきました。そのとき結婚会見の席上で、私は皆さまにお約束をいたしました。将来彼が一人の男性としてまた俳優として成長を遂げたとき、私の存在が必要ではなくなったと判断したなら、私は潔く身をひく覚悟があると・・・」

記者「つまり伊藤さんにとってもう如月さんは必要な存在ではないということですか？」

女優「そういうことです」

記者「それは伊藤さんに新しい恋人ができたからということですか？」

女優「そんな単純なことではありません。伊藤の女性問題など今に始まったことではありませんもの」

記者「ではなぜ今回に限って離婚に発展したのですか？」

女優「彼は男としても俳優としてもすばらしく成長しました。そしてこれからも成長し続けることでしょう。今後彼にはそれなりにふさわしい伴侶が必要となるでしょう。がそれは私ではないということです」

記者たちのしつこい質問攻めにも女優は毅然として答えていた。

「なんか、如月みゆき、かつこいいですね」

私は思わず見とれていった。

「さすが女優だね、夕方あの席で泣いていたのと同じ人物とは思

えない」

八嶋が相槌を打った。

「そうか、女優が泣いていたのか」と店長。

翌日、写真週刊誌が伊藤英二と新人女優のツーショットをスクープした。記事によると新人女優はすでに妊娠しており引退して今後は専業主婦になるという。

店長「女のプライドってやつか？」

私「女優のプライドもありますよね」

シェフ「わからないでもないけどね。でも、昨日泣いていたのは確かだからね。気丈に振舞っていても本心はつらいんだろうなあ」

店長「おい二人とも、レッドアイのネーミング決まったぞ」

私とシェフ「何ですか、店長？」

店長「『ティア オブジ アクトレス（女優の涙）』だ」

「ハイい？」このとき初めてシェフ八嶋と私は共感した。

グラス7 若きシェフの憂鬱

<フロツケンベーカリー>は欧州ビールカフェと同じ通り沿いに立つ、人気のパン屋さんだ。

シェフ八嶋がいち早くその味の良さに目をつけ、以来食パンやバケツトを始め、数々のパンがカフェのランチメニューに欠かせないアイテムとなっている。焼き立てを届けてもらうこともあれば、私がお使いに出ることもある。

その日の朝。

カフェの前まで出勤してくると、店から顔なじみの若い女の子が出てきた。

「あつ、おはようございます。副店長さん（＾＾）」

ベーカリーでバイトをしている、笑うと右のほほにえくぼができるかわいい子。名前は何だったっけ…。

「おはよう、確かフロツケンベーカリーさんの…」

「伊藤まさみです。ちょうど今、焼きたてのマフィンをお店にお届けしたところです」

「それはご苦労様ですう。おたくのパンはどれも本当においしいよね。うちのお客様にも評判いいし」

「ほんとうですかあ？ 嬉しいです（＾＾）」

「またよろしくね（*^^）」

「こちらこそよろしくお願いします…。じゃあ私お店に戻りますのでこれで失礼します。どうもありがとうございました」
彼女は丁寧に頭を下げると人懐こい笑顔を浮かべ、通りをベーカリーに向かって歩いて行った。

カフェに入るとなんともいえない芳香が店に充満していた。

シェフ八嶋が焼きたてのマフィンを紅茶で流し込んでいるところだった。

「おはようございます八嶋シェフ、すごくいいにおいですね」

「おっ、おはよう城戸ちゃん、今まさみちゃんが焼きたての「王様のマフィン」を届けてくれたんで、試食していたところなんだ。アチチッ」

シェフ八嶋、すすっていた紅茶のカップから反射的に唇を離れた。
心なしかあわてている様子だ。（まさみちゃんなんて呼んで意外と親しいんだ）

「そうなんですか？ でもコーヒー党の八嶋シェフが紅茶だなんて珍しいですね」

「コーヒー党ってのは心外だなあ。ヨーロッパ各地を放浪してきた僕としては郷に入れば郷に従えってのがポリシーだよ。このマフィンにはやっぱり紅茶なんだよなあ。さしずめルピシアのベルエポックかフォションのアルグレイってところが妥当だね」

「さすが、マニアックですね。そのまさみちゃんと今そこであいましたけど、いい子ですね。」

すると急にシェフ八嶋の顔が輝いた。

「でしょう？ 明るくて清楚で…。それでいて控えめでさあ、いまどきなかなかないよね、ああいう子」

なんだか目が潤んでる。シンクにはもうひとつの飲み終えた紅茶力

ツプが下げである。

ハハーン、なるほどね・・・と心でつぶやいた。

「な、何だよ、城戸ちゃん。気味悪い笑顔して」

「イエ、別に・・・」(やっぱり私って考えてることが顔に出ちゃうんだ)

その日のBランチはすこぶる好評だった。

フライした白身の魚(この日は鱸)をシェフ特性のタルタルソースに絡め、たっぷりの野菜とともにマフィンでサンドしたシェフ渾身の自信作、FBスペシャル。(シェフのネーミング・・・フィッシュを使ったBランチの意味。イギリスのフィッシュ&ベッドにかけているらしい)

パスタ系のAランチと違い、軽いパンがメインのBランチはお昼時を過ぎてもオーダーが入る。

「王様のマフィンあと2個しか残ってませんね。シェフ、私フロツケンベーカーまで買いに行ってくださいようか？」

「いや、これでやめておこう。あと2個しか残っていない、言い換えれば2個も残っているんだ。SOLD OUT=売り切れというのはチャンスロスという危険もはらんでいるけど食べ損ねたお客にとっては想像以上の付加価値を持つからね。次回の購買意欲につながるんだよ。だから今日のところは残り2つのマフィンを閉店までににさばく方向で考えよう」

「わかりました・・・でも八嶋シェフって結構分析脳力あるんですね」

「アハハ、正直言うと今のは店長の受け売りだよ。ヨーロッパを放

浪している時、ひょんなことから店長と知り合っただけ。当時の僕は皿洗いのバイトしながら各地を歩き回る貧乏学生でさ。店長は親父さんの会社に入って世界各国のホテルで修行の身だったのさ。そのとき店長からはいろいろ教わったんだ」

すると背後から聞きなれた低い声がした。

「そんなこともあったな」

「あ、店長おかえりなさい」(ホント、いつもながら神出鬼没な人だ)

「お客を連れてきたぞ」

そして手で押さえたドアのむこうに向かって「君たち入ってきたまえ」といった。

すると女子高生が4人、きよろきよろしながら入ってきた。皆近く的女子大付属の制服を着ている。何人かは地元のタウン誌を胸に抱えていた。

少女A「なんか記事で見たよりお店狭いね」

少女B「でもなかなかこじやれてるじゃん」

すると少女C、厨房のシェフ八嶋を指差した。

「あれ、写真にでてたシェフじゃない？」

少女AとB「マジイ？本物のほうがかつこよくね？」

少女C「やばいよ、店長もいけてるけどあたしあのシェフ、マジ好みかも」

少女A「あたしはやっぱ店長かなあ、背え高いしい」

少女B「あれ、店長は？」

そっぴいえば店長、彼女たちを店に呼び込んだとたんに姿を消していた。

（やれやれ店長またいなくなっただ。それにしてもこの子たち記事とか写真でいつてるけどなんのことかしら…）

そういえば2ヶ月ほど前、地元のタウン誌の記者が来て、カフェとランチメニューの紹介をする記事を書きたいといって取材していったことがあった。女性の記者はインタビューと撮影を一人でこなし、2時間ほどで引き上げていった。

あの時は開店してまだ間もなく、私たちスタッフもあたふたしていたので、その後取材のことなどすっかり忘れていた。

少女たちはタウン誌を手はこの店の前にいるところを、外出から戻ってきた店長に声をかけられ、店に入ってきたらしい。

4人はカウンターに近い席に座るとメニューを取り上げた。

「あのう、Bランチってまだありますか？」と少女A。

「ごめんなさい、今日は特に好評であと2人分しか残ってないの・・・あの、もしよかったらシェフお勧めのベルギー風パンケーキはいかがですか？」

勧める私に、入店以来ただ一人一言も発していなかった少女Dが遠慮がちに口を開いた。

「あ、私そのシェフお勧めのパンケーキいただきたいです」

するとすっかり気をよくしたシェフ八嶋、

「君たちせっかく4人できてくれたんだから、パンケーキとBランチ2つづつにしてシェアして食べたなら？」

と提案した。

結局4人の少女たちは水とおしゃべりですごした。ただ店を出るとき、一番無口だった少女Dだけは厨房のシェフに向かって、「とてもおいしかったです」と丁寧に頭を下げていった。

翌日。

ようやくランチタイムの忙しさから開放されてのんびりしていると。

昨日の女子高生のうちの一人が入ってきた。一番控えめな少女Dだ。

「いらつしゃいませ。今日は一人？」

「はい、シェフのベルギー風パンケーキがあんまりおいしかったものですから、また食べたくなくなっちゃって・・・あの、まだありますか？」

少女は小さな声で恥ずかしそうに上目遣いで私を見た。

すると厨房からシェフ八嶋が気がついて、

「やあ、いらつしゃい。パンケーキはいつでもOKだよ。すぐ焼くから待っててね」

と声をかけた。

少女は顔を紅潮させてコクリとうなづいた。

「今お水持ってくるね、どこでも好きなとこ座っていいわよ」

すると少女は迷わずカウンターに行き、厨房が一番よく見渡せる真ん中の席に腰を落着けた。

（この子恥ずかしがり屋のわりにストレートに自分を表現するタイプなんだ）

厨房はカウンターの奥にある。間仕切りはないが、下がり壁になっていてその下はちょうど対面式キッチンのように、調理台やガス台、シンクがあり、カウンターのお客からはシェフの声も動きも丸見えになる。少女が座ったカウンターの中央は、厨房の壁際のコの字型の作業台まで見渡せた。

少女Dはシェフがパンケーキを焼く間、じっとその様子を見ていた。パンケーキが具されると静かにそれを食べた。食べ終わるとまた厨房で作業するシェフの姿を見つめていた。1時間ほどそんな風に過ごした後、昨日と同じように「とてもおいしかったです」といって頭を下げて帰っていった。

「なんかシェフに熱い視線送ってましたね」

「よしてよ城戸ちゃん、まだ高校生だよ」

「いまだ高校生っていつたら立派に女ですよ」

「僕は基本的にガキには興味ないの。どちらかといえば大人の女性のほうがいいよ。若くてもせいぜい23、4はいてないと女とはみなせないな」

「ベーカーリーの伊藤まさみちゃんとかですね」

「何だよ、やぶからぼくに」

シェフが珍しく顔を赤らめた。

「八嶋さん見てたらわかりますよ。でも彼女とだったらお似合いだと思いますよ」

「そ、そうかい？」

シェフ、すぐくうれしそうだ。

「ハイ、仲良くしてるみたいじゃないですか。今朝も一緒に紅茶飲んでいたんでしょう？」

「アハ、城戸ちゃんも人が悪いな。焼き立てマフィンを届けてくれるとつい食べたくなっちゃってさ。はじめはコーヒーで食べてたんだけど、まさみちゃんが紅茶のほうが合うからってあるときティーバックを数種類持ってきてくれたんだよ。あの子紅茶には結構詳しいみたいで」

「それから配達の際にまさみちゃんとお茶するようになったんですね」

「ま、まあそんなところかな」

「なるほど、それで最近では本格的な茶葉や機材にティーカップまで揃えたわけですか」

「別にまさみちゃんのためというわけではないぜ」

「わかってますよ、でも・・・」

「え？」

「八嶋さん、確かわたしより2つくらい年上でしたよね」

「うん、それがどうしたの？」

「ということは今34歳。まさみちゃんは確か24歳。もしシェフが本気で彼女と付き合いたいならここでひとつ思い切った行動に出たほうがいいですよ」

「思い切った行動って・・・」

「デートに誘っちゃうんですよ」

「デートかあ。しかしいきなり誘うってのもなんか唐突だよなあ・・・」

するといつの間に帰ってきたのか店長安倍が口を挟んだ。

「映画のチケットが手に入ったから一緒に行かないかと誘うってのはどうだ？。話題作なら無難だし誘われたほうものりやすいだろう」

「なるほど、古典的な手ですが、今のシェフとまさみちゃんの間を考えると、一番自然な誘いかたですね」と私。

シェフ八嶋は俄然やる気が出てきたらしい。

「よし早速ネットでチケット2枚手に入れよう」

翌日の昼下がり。

例の少女Dはまたやってきてパンケーキを注文した。

いつもどおりカウンターの中央に座り、待っている間も、食べ終わってからもじつとシェフを見つめている。どうやらこの子、本気でシェフ八嶋に恋しちゃったらしい。

しかし肝心のシェフは心ここにあらずであった。

手に入れたチケットを、明日まさみちゃんに渡すことで頭がいっぱいなのだ。

少女Dの送る熱い視線などまったく気づかない。

「八嶋さん、早く明日の朝が来るといいですね」
「からかうようにわたし、シェフの耳元で囁いた。」

と、怒気を含んだ少女の視線がわたしを刺してきた。
(しまった、この子に恨まれちゃう)
恋する乙女にとって、彼に近づく女はにつくき敵なのだ。

すると少女は立ち上がり、

「あのう、八嶋さんちよつとお願いがあるんですけど・・・」
と喋ってかばんからチケットを取り出した。

「公開中の『パイレーツオブカリビアン』友達に譲ってもらったんですけど、一緒に見に行きませんか？」
きょとんとしていたシェフ八嶋はそのまま凍りついてしまった。彼もまた同じ映画のチケットを入手していたのだ。

「あの・・・悪いんだけど僕その映画、この前友たちと観に行っちゃったんだよね」

「えーっ、そうなんですか？」

少女は心底がっかりしたようだった。

「じゃあ・・・帰ります」

そしてそのままかばんを持ってレジに向かった。

すると突然お店の扉が開いてお客が一人飛び込んできた。

「いらっしやい・・・あれ、まさみちゃん、配達は確か明日よね」
わたしの声にすぐ反応してシェフ八嶋が厨房から出てきた。

「やあ、まさみちゃん、こんな時間にめずらしいね」

「休憩時間なんです。30分ですけど、一度話題のベルギー風パンケーキを食べたくて・・・」

「了解。すぐ焼くからそこに座って待っててね」

シェフはまさみちゃんにカウンターの中央の席、つまり今まで少女Dが座っていたところをすすめた。

少女の怒気を含んだ視線が今度はまさみちゃんに向かった。

何も知らないまさみちゃんは、メニューを繰りながら楽しそうにドリンクを選んでいる。

「ねえ八嶋さん、そのパンケーキには何を飲んだら合いますか？」

「僕個人としてはベルギービールのロミーピルスをおレンジジュースで割る、オリジナルのビアカクテル『オレンジ サンセット』がお勧めなんだけど、勤務中だからアルコールはだめだね。まさみちゃんは紅茶党だから、ルピシアのフレーバードティをアイスでつくってあげよう」

「わあ、うれしいな」

無邪気に喜ぶまさみちゃんと、でれでれしているシェフ八嶋。いつものわたしなら、一緒に喜んでむしろ二人をあおるところだ。しかしすでに少女Dの怒りは頂点に達している。

「そういえば、八嶋さん、映画って好きですか？」

するとまさみちゃんはベーカリーのエプロンのポケットからチケットを取り出した。

「実はさっきお客さんから『パイレーツオブカリビアン』のチケットいただいちゃって・・・よかったら一緒にどうかなって」

すると少女D猛然とカウンターに歩み寄ってきた。肩で息をしながら明らかに興奮している。そしてぴたりとまさみちゃんの前で止まった。

「残念ですけどシェフは先週この映画見ちゃったんですって、ね、八嶋さん」

きつと八嶋をにらむ。

「え？ああ、うんまあ・・・」

あいまいに答えるシェフ八嶋の困った顔。

再び少女はまさみちゃんを見て呼吸が落ち着くのを待った。

「じゃあわたし帰ります。ご馳走様でした。」

少女Dは心なしかいつもより乱暴にお金をレジカウンターに置くと、そのまま店を出て行った。

「なんかさっきの子、八嶋さんのこと好きみたい」

パンケーキをアイスティで流し込みながらまさみちゃんがポツリといった。

「そんなんじゃないよ、ただうちのパンケーキが気に入ったみたいで・・・」

「うふ。八嶋さんもてるんですね。でもホントにこのパンケーキおいしいです。ごちそうさまでした」

まさみちゃんはお会計を済ますと、時計を気にしながら帰って行った。

「どうして後からでもホントのことまさみちゃんにいわなかったんですか？せつかくのチャンスだったのに」

「あの高校生の子にうそついて断ったあとだぜ。いくらなんでもそんなことできないよ」

「シェフって店長と違ってまじめなんですね」

少し歯がゆい気がした。シェフの顔は後悔と苦痛にゆがんでいた。

翌朝カフェに出勤すると、店内は例のマフィンの焼きたての香りが満ちていた。

「まさみちゃんもう帰ったんですか？」

するとシェフ八嶋、とても低いテンションで

「今日はパートのおばちゃんが来た」

「えっどうして・・・？」

「まさみちゃん、就職が決まったんだって」

「就職？」

「大学卒業した後就職浪人で、バイトしながら就活してたらしいんだけど、昨日突然採用が決まったらしい。中途採用だから今日から早速出社なんだって」

「なんだか急な話ですね」

「こんなことなら一緒に『パイレーツオブカリビアン』観にいけばよかったよ・・・」

「八嶋さん、そんな落ち込まないでくださいよ。たまたまタイミングが悪かっただけです」

すると突然事務所の扉が開き、中から店長が現れた。どうせ朝方帰ってきて、事務所のソファで寝ていたのだろう。大きくあくびをしながら、

「そのタイミングってのが大事なんだ。スタートでタイミングがずれるようなら、所詮その恋はうまくは行かない。八嶋、そのまさみちゃんとは縁がなかったと思って諦めるんだな。お前ならまたいい女が現れるさ」といった。

「ええ・・・そうします。もともと僕は若い子より、ちょっと大人の女性が好みだし」

（この人意外と立ち直り早いかも・・・）

こうしてシェフ八嶋の恋が始まる前に終わった。

同時に少女Dの短い片思いも終わった。少女はそれきりカフェには来なかった。

シェフ八嶋はまたコーヒー党に戻った。

「ねえ八嶋さん、いつかまさみちゃんに飲ませたいっていったシエフオリジナルのビアカクテルなんていいましたっけ？」

「ああ、『オレンジ サンセット』ね」

「オレンジのたそがれが目浮かぶような素敵なネーミングですね」

「ありがとう。アルコールが苦手な女の子や、おやつときにスイーツと一緒に飲めるビールがほしいと思って作ってみたんだ。飲んでみるかい？」

「はい、ぜひ」

そしてシェフは生のオレンジをピルスナーグラスに絞っていれ、さらにベルギービールのロミーピルスを上注いで軽くステアした。グラスのふちには厚く切ったオレンジのスライスをおしゃれに飾ってわたしに差し出した。

はじめにオレンジの爽やかな甘みと酸味。続いてかすかに感じるアブリコットの香り。そしてホップの苦味がついてくる。

そしてロミーピルス特有の繊細でやわらかい舌触り。それらが渾然一体となつてのどを通っていく。

「すごくおいしい　　こんなの初めてです。それにこのビール、まるでベルベットのようになめらか…」

「気に入った？」

「ハイ、切ない恋の味がしますう（＾―＾）b」

「それを言つなつて（＜―＞）」

グラス8 女主任登場

「本日よりうちの経理を担当することになった、本社経理課主任の片桐若葉君だ。よろしく頼む」

店長安倍の紹介を受け、傍らの女性にはこりともせず頭を下げた。ウェーブのかかった髪はセミロングで、きりつとした顔立ちに黒いふちのメガネをかけている。

年は40を過ぎたくらい。薄い唇と高い鼻。一重まぶたの瞳から発せられる光は鋭く、女性にしては大柄で、長身の店長と並んでいても頭ひとつほども差がない。

「では片桐君、一言挨拶を」

店長に促されると、彼女はシェフの八嶋と私を交互にみすえてから、おもむろに口を開いた。

「入社して20年。5年前に本社の総務部に異動し、昨年より経理課の主任として勤務。私のことは片桐主任と呼ぶように」

店長安倍が大きく咳払いをした。

「えー彼女は小売や営業の経験も豊富だし、接客マナーも完璧だ。総務に移ってからは事務でも手腕を発揮している。まあ、みんな仲良くやってくれ」

早速シェフ八嶋、

「なんだか、おっかなそうなおばさんだね、城戸ちゃん」
私の耳元に近づいて囁いた。

すると彼女の鋭い目が八嶋をにらみつけた。

「八嶋シェフ、何か？」

思わず心臓がドクンと大きく波打った。私はこういう状況が苦手だ。
なのに八嶋は

「いえ・・・本社の経理の方が来られていきなり偉そうに言われても、僕としては違和感感じますね。入社何年だか知りませんが、うちの欧州麦酒力フエでは新参者なわけだし・・・。始めの挨拶くらいもっと謙虚にしたほうがいいんじゃないっすかね」
ビビっている私とは対象的にやけに毅然としている。

片桐主任は彼をにらみつけたままだ。

一触即発の空気。

主任の片桐、しばしの間まじまじと八嶋を見下ろしていたが、
「なるほど、あんたの言うこと筋通ってるわ、八嶋シェフ。大変失礼しました。これからよろしくお願いします」といって深々と頭を下げた。

毒気を抜かれた形の八嶋だが、すぐに気を取り直して「イエ、僕こそよろしく頼みます」
と頭を下げた。

（この展開って・・・？）

「あ、あのう・・・私城戸高嶺です。一応副店長やってます・・・
ってかただけですけど」

恐る恐るいうと片桐主任、今度は私をにらんだ。

「ふん、そうみたいだね」

そして私の耳元に顔を近づけて

「まっ、女は女同士、仲良くやりましょ」

ささやくようにいうと、ニッと白い歯をのぞかせ初めて笑顔を見せた。

(うつ)

気持ちとは反対に精一杯の笑顔を作る私。

偉そうかと思えば謙虚、こわいかと思えばちょっとやさしい。

なんだかよくわからない人だ。

お店の開店と同時にランチタイムが始まった。

片桐主任ははじめ店長と事務室のパソコンで帳簿をチェックしていたが、店が混みだすとエプロンをして接客を始めた。

そして彼女は数分と立たぬうちに頭角を現した。

鮮やかな客さばき、電話の応対。メニューは全て頭に入っているし、ヨーロッパの知識も豊富だ。

私は彼女の仕事ぶりと勢いにただ圧倒されていた。

あわただしい時間が過ぎ、少し落ちついた。

洗うためのお皿をシンクの横に積み上げていると、片桐主任が一番上の皿に残ったパスタソースを指ですくい取ってぺろりと舐めた。

「・・・ふうん、御曹司が見込んだだけあって八嶋シェフ、腕はたしかみたいね」

(御曹司だなんて、このひと店長のことそう呼ぶんだ・・・)

「片桐主任でなんでもできちゃうんですね」と私。

「まあね」

そしてちらりと私を見ていった。

「あんださあ、本社のネット通販部から異動してきたんだって？入社何年目？」

「3年です・・・中途採用ですけど」

「っていうことは会社のホームページとかあんだも製作してたの？」

「いえ、私はネットで注文受けたり商品を梱包して発送したりするくらいで・・・ホームページの製作は平川係長に任せきりでした」

「ふうん・・・」

片桐主任は改めて私を値踏みするようにじろりと一瞥をくれた。しかしすぐ興味を失ったのか視線をそらし、キッチン用具の収められた棚に手を伸ばして包丁をとった。

「ねえ八嶋シェフ、このたまねぎみじん切りにしておくよ」

「いいですよ、片桐主任。僕の仕事だし・・・だいたい素人に僕のキッチン道具使ってほしくないし」

「大丈夫、あたし調理師免許持ってんの、それに道具触らせたくないなら明日からはマイ包丁持ってくるから。それよりそっちの特性パスタソースはあんだしか出せない味でしょ。ただでさえ人手不足なんだから、効率よく動こうじゃない」

そういつて片桐主任は鮮やかな手つきで瞬く間にたまねぎをみじん切りにしていった。

するとシェフ、あっさりと「じゃあ片桐主任にお願いしようかな」
素直にいった。

驚きだ、私にはおたまひとつ触らせないのに。

「じ、じゃあ私お皿洗います」

なんだかあせってきた。このままじゃ私の居場所がなくなってしまう
いそうだ。

夕方。

店が忙しくなつてくると片桐主任は接客だけではなく、厨房でもシェフ八嶋をフォローしたりして、私の3倍くらい働いた。

驚いたことに外国人観光客らしいグループが入ってきたときは、英語でべらべらサービスをしていた。

日本語以外まったく話せない私は、今までこういう状況の時にはシェフか店長に任せっぱなしだったのだ。二人とも海外生活の経験があるので英語は堪能だし、特にシェフはイタリア、フランス、スペイン語が話せるらしい。

「片桐主任も海外生活とか経験があるんですか？」
一息ついたとき思わず彼女に聞いてみた。

「ない。ただあたし英検準一級もってるの。あとトイックはこの前680点とつたから」

そして驚いている私の耳元でさらに囁くようにいった。

「朝の自己紹介のとき言うの忘れたんだけどさ、あたし趣味は韓流ドラマと資格取りだから」

「はい？」

数日後の昼下がり。カフェには店長安倍、シェフ八嶋、そして私の

3人。

片桐主任はまだ来ていない。彼女はいつも誰よりも遅く出勤しそしていち早く早く帰る。店に立つこともあれば事務所にこもってパソコンしているだけのこともある。そろそろランチタイムもピークになるがまだ姿を現していない。

店長によると、片桐主任は本社付けなので、毎朝本社に出勤してからこちらに来る。カフェを出るとまた社に戻ることもあるらしい。

彼女のカフェでの任務は、店の手伝いと売り上げ向上、そしてスタッフ教育の徹底らしい。

「給料も本社から出ているから、何時間働いても一切人件費はかからない。だからうちとしては大いに利用できる」と店長安倍はいう。

確かにあれだけの能力で人件費は本社もちなカフェとしてはおいしい話なのだろう。

「でも彼女、調理のセンスといい、味覚の鋭さといい、よく勉強しているのは確かだよ」

シェフ八嶋が珍しく冷静に人を褒めた。

「英語もペラペラで外国のお客様のとき、今までは店長やシェフに頼っていたのに、すごく助かってます。」と私。

「あいつは昔から資格マニアで、そのほとんどを通信教育で取得しているんだ」と店長。

「海外旅行の経験無いのにあんなに流暢にしゃべれるのってすごいですね」と私。

するとシェフ八嶋、メガネの眉間の上辺りを軽く押さえ、
「まあ、彼女のはアメリカングリッシュとしてはパーフェクトだね」
と含みのあるいい方。

「どういうことですか？」

「僕や店長のはクイーンズイングリッシュだから、つばが飛ぶようなアメリカンと違って発音が上品なのさ」

「そついうもんですか・・・私にはさっぱりわかりません」

すると店長安倍が私に向かって

「オイ、お前は何か資格とか持っていないのか？」
と聞いてきた。

「すみません、小学校のとき通っていたソロバン教室で6級もらったくらいで、後は何も・・・」

ちょうどそのとき片桐主任が厨房にある裏口から入ってきた。

3人がいつせいに注目する。

「なに？」

首を傾げてから片桐主任はいつもの通勤用のバッグともうひとつ、紙袋を持って事務所に入っていた。入り際店長に向かって
「ちよつとみんなに話しておきたいことがあるので、あとで時間つくってください？」

午後3時50分。店内が一息ついた時、店長が集合をかけ私たちス
タッフはカウンターの隅に集まった。

そこへ片桐主任が口火を切った。

「ここ数日、この欧州麦酒カフェで働かせてもらって、店の運営や
経理の状況を見させてもらった。それで改善策をまとめてきたの」

「そうか、片桐。では報告してくれ」と店長。

「経費で節約できる点がいくつかある。反論もあるだろうけどに
かく聞いて。まずランチなどの材料費だけど仕入れコストをもう少
し下げたいの。レシートを見るとほとんどの食材を伊勢屋スーパー
で仕入れてるけど」

そう、シェフ八嶋が書き出したリストを持って、いつも私が買い物
に行くスーパーだ。

「あそこは有機野菜を扱っているし、ほかの食材も安全でクオリテ
ィーが高い。少々値ははるけど、僕は料理人として食材だけは譲れ
ないっすね」

シェフ八嶋、例のごとく鼻息が荒い。

すると片桐主任めがねの奥からシェフをにらんだ。

「有機野菜はいいとして、ほかはスーパーマルミヤでいいんじゃないの？調べただけ調味料などの品揃えはマルミヤのほうが豊富だし、
全体的に1割近く安い」

するとシェフ腕を組みなおして、

「まあ、城戸ちゃんには買い物負担がかかるけど、主任がそいう
なら・・・」

としぶしぶうなづいた。

「あ、私ならぜんぜんかまわないです」

「それから光熱費をもっと抑えたいの。お皿を洗うとき流水の量に気をつけること。それから今月中に店の照明はすべてLEDに換える。エアコンと冷蔵庫の設定温度を一度上げる」などなど・・・片桐主任の支持が続いた。

どれも少し気をつければ実行できることばかりだったので、皆従うことにした。

「最後にあとひとつだけ」と片桐主任。

「いい加減にしてくださいよ、そろそろ夜の仕込みに入らないと」うんざりしたようにシェフがいった。

「Bランチでよく使ってるパン類のことなんだけど。あれベーカリーで買うのはもったいないからうちで焼いたらどう？」

するとシェフ八嶋

「それ無理っすよ、僕も世界中で食べ歩いてきたけど、あそこのマフィンにはハンパ無いっすから」

「そのマフィンのことなんだけどさ」

といって片桐主任は持参した紙袋からごそごそと白い包みを出して見せた。

中から見覚えのあるマフィンがいくつも出てきた。

「みんなちよつと食べてみてよ」と主任。

「これってフロッケンベーカリーの「王様のマフィン」ですよね」
わたしにとっておなじみのアイテムだ。
シェフ八嶋も店長も大きくうなづく。

「これあたしが焼いたの」と片桐主任。

一同が「えーっ？」と驚くのをしっかり見届けてから主任は鼻を一瞬膨らませた。

「確かにあそこはおいしいけど、ちょっと高いでしょ？だから何回か買って家でもまねして作って見た。さすがに手ごわかったけど、やっと今日うまく行ったというわけ」

「さすがだな、片桐、これならうちの店に出せるぞ」と店長安倍。

「じゃあ、もうフロッケンベーカリーでは仕入れないんですか？」
いいながら私の視線は無意識にシェフ八嶋を追っている。

「まあとりあえず「王様のマフィン」に関してはそうだな、追々品数を増やしていずれは全部自前にしていこう」と店長。

「僕も新作メニュー考えてみよう」

シェフ八嶋、フロッケンベーカリーのバイトだった、伊藤まさみちやんのことは吹っ切れているらしい。

3日後。閉店後のカフェで。

オリジナルマフィンを使ったシェフの、新作メニューの試食をすることになった。

スタッフは店長安倍、シェフ八嶋、片桐主任と私の4人。

ビールは店長の支持通り、あらかじめ5度に冷やしてある。パウエルクワック。ベルギービールだ。

深い琥珀色でアルコールは8・4度とやや高め。飲み口はやさしいが、ど越しはガツンとくるおいしさ。

シェフが「皆さんお待ちどう様」といって登場したのはやや小ぶりのトーストしたマフィンのサンドイッチ。

「カンパニー！頂きまーす」空腹の一同はいっせいにマフィンにかぶりつく。

その瞬間口いっぱいに広がるミラクル。異なるチーズの個性がカリカリにトーストしたマフィンの中で溶け合い、口中で渾然一体となつてさらに奥深い味わいをももし出している。

すでに涙目の私「熱々でカリカリのマフィンの中から2つの違った食感。たまりません」

八嶋のうんちくがはじまる。「ハードなチエダーと、なめらかなステイルトンという2つのチーズが決め手なんだ。特にステイルトンはエリザベス女王の好物というブルーチーズ、バターのようにしょっつう？

今日はアーモンドやピスタチオなどナッツ類を砕いて一緒にはさんでいるけど、ドライフルーツもいけるんじゃないかな、いかがですか、店長？」

「早速ランチメニューにしていぞ、八嶋」

「それならこのレシピのネーミング考えなくちゃ」と私。

「あ、それならもう決めてある」と片桐主任。

「え？何ですか？教えてください」

「「クイーンズマフィン」よ。店長とシェフの完璧なイギリス英語に敬意をこめてね」

片桐手主任は肩をすくめ、ニッと笑って見せた。

（うつ）

これにはシェフも苦笑いした。

店長が2本目のパウエル クワックをもって立ち上がった。

「あらためて乾杯だ。片桐君の歓迎と新作メニューの完成を祝って乾杯！」

一同「乾杯」

そして「ようこそ欧州麦酒カフェへ、片桐主任！」

グラス9 マダムたちの午後

プロローグ

「コーチ、私のことなら気にしないでください。私のせいでご迷惑をかけるようなことになったら申し訳なくて・・・私はいつでも身を引く覚悟ですから」

「あなたが心配することじゃない。僕がふがいないばかりにかえってすみません。、彼女たちとはもう一度話し合って分かってもらうつもりです。だからもう少し辛抱してほしい」

一日目。昼下がり。

カフェ店内の中央にある楕円形のテーブルは、10名前後が着席できる、店のメインステージ。

その日囲んでいたのは華やかなマダムたち。

カジュアルな服装だが身につけているのはどれも高級品ばかり。それもそのはず、彼女たちはこのすぐ先にある高級テニスクラブの会員だ。入会金が驚くほど高額で有名なそのクラブ・・・通っているのはお金持ちのセレブばかり。カフェの彼女たちも皆華やかで美しい。

中でもひとときわ輝いているのは芳川婦人。飛び切り美人な上、服装のセンスも抜群だ。

皆が彼女に憧憬と敬意を持って接しているのがわかる。

「でも芳川様、今日のプレイも冴えていらしたわ。」

「本当。立て続けに3本もサービスエースお出しになるんですもの。」

思わずあのコーチが芳川様にガッツポーズ送ってたの見てなんかやけちゃったわ」

マダムたちは皆口々に褒め言葉を投げかけるが、芳川婦人はツエラタール ヴァイスを飲みながら悠然と構えていた。

「そういえば西田さん、少しはお慣れになつて？ 最近ストロークが安定してきたようだけど」

「とんでもないですわ、芳川様。私なんて入会したばかりで、まだまだです」

芳川夫人に名指しで褒められ、西田夫人は頬を紅潮させた。

ほかのマダムたちの羨望のまなざしがいつせいに彼女に向かう。

マリーアントワネットの取り巻きのように、誰もが芳川夫人に声をかけてもらうのを待っているのだ。

ただ一人をのぞいては・・・。

黒木夫人は芳川夫人から一番遠い席に座っていた。

こちらにも芳川夫人に負けなくらい美貌の持ち主だ。しかもずっと若い。

しかし彼女、近くのご婦人方から話しかけられるまま、相槌を打ってはいたが上の空。その目は一人の女性を凝視していた。

そこに現れたのがうわさのイケメンテニスボーイ。

マダム一同の視線がいつせいに彼に集中する。

「コーチったら遅いじゃない」

「すみません。ほかのグループに呼び止められちゃって」

イケメンコーチはさわやかな笑顔で迷わず芳川婦人の隣に座った。

そう。テーブルの上席に座った芳川婦人の右側は、お約束どおり空

席になっていたのだ・・・。

それからマダムたちとイケメンはひとしきり盛り上がり、瞬く間に時は過ぎた。

「あらもうこんな時間、お買い物して帰らなくちゃ」

一人のマダムが切り出すと、皆いつせいに時計を見て帰宅モードになった。

「では皆さん、来月の団体戦に向けてがんばりましょうね。私とコーチははまだ少し打ち合わせをしていくから、皆さんお先にどうぞ。支払いはご心配なく」

例によって芳川婦人の一言でお開きとなり、めいめいが席を立つ。

「いつもご馳走様です。芳川様、コーチ、また来週」

「芳川様、コーチ、お二人ともごきげんよう」

一人また一人と夫人とイケメンに愛想をふって出て行った。黒木夫人はいつ出て行ったのか、とうに姿は無かった。

テーブルに残った芳川夫人とイケメンコーチ。

夫人はシニョンをほだいてロングヘアを肩までなびかせた。

「たまには私のマンションに寄っていかない、タクヤ？」

「いや、今日は疲れたから遠慮するよ」

「じゃあビールを一杯付き合ってくれる？」

「あなただけ飲んだらいい。僕は車だからマンションまで送るよ」

そして芳川夫人は再びオーストリアビールツェラータル ヴァイス

を注文した。

翌日の夜。

店内の片隅で人目を忍ぶ一組のカップル。

男は例のイケメンコーチ。でもお相手は別の人。

あの黒木夫人だ。

「昨日はどういうことよタクヤ？あんな女のご機嫌ばっかりとって」

「そういう言い方はやめろよ、仮にも・・・」

「ああもうたくさん、タクヤにはうんざりするわ、みんなにいい顔するのよね」

「たまたまこうして同じテニスクラブで出会ったんだぜ、いがみ合っていないで仲良くやってくれよ」

「そうはいくもんですか、こうなったらとことん納得のいくまで食下がってやる」

「どうすんだよ」

「あの女と対決するのよ。タクヤ、明日ここへつれてきて」

翌日深夜。店のいちばん奥のテーブルに座った3人。

口火を切ったのは一番興奮気味の黒田夫人。

「それでタクヤ、結論はでたの？」

「それがその・・・」口ごもるコーチ。

「まあまあ、ひななちゃん、落ち着きなさい。あなたも人妻で一児の母なのよ」

いつもらしからぬ様子の芳川婦人。

「それとダブルスのペアは関係ないでしょう、何で今度の大会で私

「があんな初心者とペアを組まなきゃなんないのよ」

「わがまま言わないでちょうだい、私たちはプロじゃないのよ。試合に勝つことよりもまずはチームメイトの和が大切なの、それなのにひななったら自分のことばかりいつて・・・」

「何よ私ばかり悪者にするのね、自分はカリスマ主婦テニスプレーヤーを気取っているんじゃないけど」

「たまりかねてイケメンコーチが口をはさんだ。」

「お袋も姉貴もいいかげんにしろよ。そもそもあんなたちのいざこざはペアのいれかわりだったんだよね。姉貴はお袋と一緒に今まで数々のメダルを取ってきたからいまさらコンビの解消はしたくない、でもクラブの古株でチームのまとめ役のお袋にしてみたら、会員の気持ちをつないでおくためにもペアのメンバーの入れ替えは定期的にしておきたい」

「だからってよりによつてあのド素人の西田夫人と私がペアを組めだなんてひどすぎるわよ、ママ」

「でもあの子ホントに素質があるのよ。ひななちゃんみたいなセンスのいい子と組めば絶対お互いが伸びると思ったから・・・」

「俺も西田さんの素質には一目置いていたんだ。だからお袋から姉貴と西田さんのコンビの話聞いたときには、悪くない話だと思ったよ」

「あら、そういうことだったの」
「やっと納得いったのか黒田夫人、少し顔つきが穏やかになった。」

「でももう遅いんだ。今回のことで西田夫人すっかり参っちゃってさ、数日前、ロッカールームで呼び止められて言われちゃったよ、このクラブやめるってさ。悩んでいたらしいけど、ご主人の単身赴

任先について行くそうだ」

そして・・・。

母と娘のダブルスコンビが復活した。イケメンコーチの肩の荷が下りた。

後味の悪さがしばらくクラブのコート間を漂っていた。

が、マダムたちのあくなき葛藤はその後も続き、いつの間にか風化していった。

グラス10 御曹司店長の野望

「安倍店長と片桐主任で付き合い長いんですか？」

カフエの閉店後、お皿を厨房まで運びながら、思い切って私は片桐主任に聞いてみた。

珍しくご機嫌のようで鼻歌交じりに伝票を集計していたからだ。

主任はレジから引き出した伝票をぐるぐる巻きながらちらと私を見て、「まあね」といったきりまた視線を戻してしまった。

店長安倍とシェフ八嶋は早々と仕事を切り上げて、事務室のテレビにかじりついている。

まもなく始まる女子サッカーの世界大会観戦のためだ。

二人とも試合そのものよりも、プレイヤーに興味があるらしい。さつきからの国の誰それがかわいいとか、ナイスパディだとか、そんな話で盛り上がっている。

今日はお客も少なく片付けも楽なため、私は一人で皿を洗い始めた。

「同期入社なんだよね」

主任がシンクに集めたふきんを洗いながらつぶやいた。

「はい？」

「御曹司とあたし、大学4年のとき本社の内定決定者の説明会で、初めて顔あわせたってわけ」

「そうだったんですかあ、初耳です」

「もともと同期が少なかったし、当時を知ってる人もほとんどいないからね。今残ってるのはあたしと安倍店長、あとはあんたもよく知ってる本社の平川君くらいだよ」

「あの平川係長も・・・みんな仲よかつたんですか？」

「まあ・・・ね、研修とか厳しかったから助け合ったりしたよ。でも入社したとたん、配属がばらばらになっちゃって。あたしは外回りの営業で、平川君は当時できたばかりのインターネット部門、そして御曹司はそれこそ毎月配置換えでいろんな部署をまわった挙句、一年もたたずに海外転勤」

「ヨーロッパのホテルやレストランで修行したっていう？」

「そうそれ。あいつ何も言わないから、みんなそれまで社長の息子だなんて知らなかったのよ。御曹司だってわかったのは海外転勤が決まって送別会の時、初めて聞いた」

「それ以来御曹司ってよばれてるんですか？」

「まあね。でも親のコネで入ったといってもあいつの場合、人一倍苦労したと思うよ。社長はまもなく会長に退くけど、あいつ次男坊だから、次期社長は長男にほぼ決まりだし」

「店長ってお兄さんがいらしたんですか」

「それも飛び切り優秀なエリートで社長の自慢の長男。それにひきかえ、あいつは不肖の次男ってわけ。だからかわいい子には旅をさせるとばかりにあいつをヨーロッパに飛ばしたまではよかったけど、それが間違いのもとだった」

「いったい何があったんですか？」

「私は思わず身を乗り出した。

「確か渡欧して3年目だった。あいつがフランスにいるとき、現地の女性と大恋愛をした」

「異国での大恋愛だなんてロマンチックですね」

「ひとことながら胸が高鳴る。あの店長にも純愛時代があったのだ。

「二人は本気で愛し合って結婚の約束までしていたらしい。でも社長も奥様も皆大反対した。その女性、女優志望のダンサーだったんだ・・・結局御曹司はドイツに飛ばされた。当時名もない場末の踊り子に、彼の行方を知るすべもお金も無かった。二人は引き離された」

「ほんとにそれきりになってしまったんですか？」

異国を舞台にした悲しい恋物語が胸を突く。セピア色した映画の画像が浮かび、頭の中は妄想でいっぱいになってきた。

「その後御曹司はベルギー、オーストリア、イギリスとヨーロッパ各地に飛ばされ、10数年が流れた。その間ずいぶんと手を尽くして彼女を探したらしい。そしてわかったことはその後彼女は女優を諦め、平凡な結婚をしたらしいということだけ。それであいつもきっぱり諦めた。その後も御曹司の各国での修行は続き、ようやく昨年帰国した」

「なんて切ない恋物語なんでしょう」

「でも帰国してからのあいつ、以前の御曹司とはちよつと様子がかわっていた」

「失恋して別人になったとか？」

「そこまで極端じゃないけど、なんか仕事に対する気迫が違つように思う。あたしさあ、今回この店に配属されて久々あいつにあったんだけど、あいつこの店にかけてると思うよ。入社以来各地をたらいまわしされ、スキャンダルを引き起こした拳句の帰国だからね、周囲の風当たりは強いし、当然あいつの本社でのポストは無い。そこで次期社長の長男の提案で、ヨーロッパのカフェバーの立ち上げにあいつが任命されたんだ」

「店長はこの店に本気で取り組んでいるということですね」

「まああいつも親や重役連中に対しての意地もあるからさ」

今までいできてきた店長安倍比呂人への偏見が急速に氷解して行く。

「そういうことなら私たちもがんばらなくちゃいけませんね」

心のそこから闘志がみなぎってきた。

すると事務所から店長の声。

「オイ、お前たち、何でもいいからビールもってこい」

相変わらずの尊大な言い方だが、さすがに長い付き合いだけあって片桐主任はあっさりと答えたものだ。

「了解、今すぐいいのを持って行くからさ、待つてなよ御曹司」

そして主任片桐はまるで予測していたかのようにあらかじめ冷やしておいたビールを専用の冷蔵庫から取り出してきた。

ブレッツ ブロンド フランスのビールだ。

事務所からシェフ矢嶋が出てきた。

「二人とも遅くまでご苦労さんでした。一緒に観戦しようよ」

事務所では店長安倍が食い入るようにテレビを観ている。

「店長ってサッカーに興味あったんですか？」

「いやまったく無い」

店長は受け取ったブレッツ ブロンドをビンごとの音を鳴らしながら飲んだ。

シェフ八嶋が片桐主任と私にもおなじビールをわたしてくれる。

「店長は試合どうでもいいの」

「え？どういことですか？」

すると一気にブレッツ ブロンドを飲み干した店長が画面に映る選手と瓶を見比べながらしみじみいった。

「やっぱりブロンドはいいぞ」

F i n

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1706v/>

「ようこそ欧州麦酒カフェへ」

2011年10月9日07時51分発行